様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 1 日現在

機関番号：３２１０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2011～2012
課題番号：２３８３００６３
研究課題名（和文）インクルーシブ教育における視覚障害児の支援体制構築に関する歴史的研究

研究課題名（英文）Historical study of support system for visually impaired students in inclusive education

研究代表者
宮内　久絵　（MIYAUCHI HISAE）
茨城キリスト教大学・文学部・講師
研究者番号：40530986

研究成果の概要（和文）：ABAPSTAS は、ミリガン、リード、及びロウをはじめとする視覚障害者によって高等教育機関に所属する視覚障害者の支援体制の確立を目的に創設された当事者組織であった。当組織は当時の盲学校教育制度及び教育の質への不満と社会的偏見からの脱皮への期待から 1970 年代に盲学校の批判しインテグレーションを要求した。ABAPSTAS が要求した「サポーテッド・インテグレーション」の背景には、ミリガンの存在と、ABAPSTAS が有していた独自の障害観があった。

研究成果の概要（英文）：ABAPSTAS was an association established by three visually impaired individuals named Milligan, Reid and Low to address the issues of employment and education of blind people in higher education. Their feeling of dissatisfaction towards the quality of blind school education, the tripartite system and their personal experience of social barriers lead them to demand for integration. However, what they demanded was not just any integration but “supported integration”, and behind this there was Milligan’s personal experience and also ABAPSTAS’s unique definition of disability.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１１年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１２年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：特別支援教育
キーワード：インクルーシブ教育、視覚障害、イギリス、歴史研究

１．研究開始当初の背景

視覚障害は、障害に起因する明確な教育的ニーズが存在する一方で、障害種の中でも発生率の低い障害であることから、専門的教育の確保がしばしば課題となってきた障害種である。各都道府県に視覚特別支援学校が少なくとも１校配置されてきた日本については、これまで視覚障害児は地域から離れて視覚特別支援学校で専門的教育を受けるか、それをあきらめる代わりに地域生活を基盤に通常学校で教育を受けるかといった究極の選択を常に迫られてきた。障害児が地域の通常学校で学ぶいわゆるインクルーシブ教育を希望する保護者や子どもが増える中、初等教

育段階では通常学校で学んでいたものも、進路や学習環境および指導の専門性を考慮して中等教育段階から視覚特別支援学校に編入するケースも少なくない。平成 19 年度より特別支援教育への転換が図られたことにより、今後は、通常学校で学ぶ視覚障害児に対しても柔軟に専門的支援を提供できる新しいシステムの構築が望まれる。

こうしたシステム構築に多いに参考となるのが、イギリスの視覚障害教育である。イギリスにおいても視覚障害は発生率が低く、障害児教育政策においても対応はしばしば看過される傾向にあったことが報告されている（McCall, 1998）。しかしながら 1980 年代に特別な教育的ニーズに基づく教育へと転換し、視覚障害児の約 6 割が通常の学校で学んでいる現在、イギリスでは、視覚障害児に対して適切な教材教具の提供をはじめ、視覚障害教員資格を有する巡回教師やリソース・ティーチャーが支援に当たるなど視覚障害教育の専門性が重視された支援システムが存在する（宮内, 2007）。さらに 2002 年には、教育技能省によって視覚障害教育支援サービスにおける質的基準（Quality Standards in Education Support Services for Children and Young People with Visual Impairment）が設定されるなど、視覚障害児に対する比較的質の高い教育が全国的に保障されている。これは、イギリスと同じくインクルーシブ教育を積極的に取り入れてきた北欧や米国に鑑みても、比較的成功しているといえるであろう。そしてその成功には、学校教育全体の改革の中で、視覚障害教育の専門性の蓄積と継承を実現してきた歴史的経緯と背景があると考えられる。

２．研究の目的

本研究は、通常学校における視覚障害児の支援体制構築に向けて示唆を得るため、イギリスの比較的充実した視覚障害児の支援体制に焦点をあて、背景にある理念、思想及び歴史的経緯を明らかにすることによって、その実現条件を解明することを目的とした。具体的検討課題は 1970 年代に分離教育批判と視覚障害児のインテグレーションを要求し、その後イギリスにおけるインクルージョン導入の先導的役割を担った視覚障害当事者団体、ABAPSTAS に焦点を当て、彼らの主張ならびにその背景にある思想や理念を、文献研究およびインタビュー調査を通して、明らかにすることである。

３．研究の方法

ABAPSTAS の主張ならびにその背景にある思想や理念を多層的・多元的に究明するため、2011 年度は同団体によって政府に提出された意見書や書簡等の一次資料を用いた文献研究を行い、2012 年度は、ABAPSTAS 関係者へのインタビュー調査を実施した。

４．研究成果

（１）当事者団体 ABAPSTAS の創設背景

①ABAPSTAS 創設メンバーの経歴

ABAPSTAS は、1970 年に M.ミリガン（Martin Milligan, 1928-1998）、F.リード（Fred Reid, 1937-）、及び C.ロウ（Colin Low, 1942-）の 3 人の視覚障害当事者によって結成された。最年長であったミリガンは、1923 年、スコットランドのグラスコーにある悪評の高いスラム街、ゴーバルス（Gorbals）にて出生した。ミリガンは、18 ヶ月のときに網膜芽細胞腫のため両眼の摘出手術を受けるが、ゴーバルスが当時においては珍しかったインテグレーションを積極的に展開していたため、盲学校ではなく通常学校で教育を受けている（Magee & Milligan [1995] vii）。ここでミリガンは視覚障害児のために特別に作成された教材と専門教員の支援のもと 16 歳まで教育を受け、卒業と同時に、エジンバラ大学に進学している。

ミリガンは、大学での 3 年間、西欧マルクス主義哲学を専攻し、その後大学大学院では、マルクス哲学への理解を更に深めるためヘーゲル哲学史研究に邁進している。また社会変革への熱意を持って、大学時代には共産党に入党し、1993 年に死去するまで活発な一員であり続けた。しかし、その結果ミリガンは二重の苦悩を背負うこととなる。反共産主義が蔓延しつつあった当時、視覚障害を有している上、マルクス主義を支持する共産党員ミリガンを雇用する大学はなかった（Magee & Milligan [1995] viii-ix；Reid [1993] 11]。

失業状態が 7 年続いた後ミリガンは、経済的自立を見込める速記者になることを選択し、盲人訓練施設に入所する。速記者とは、第二次世界大戦後、製造職に代わるいわゆる盲人のホワイトカラー職業として開拓が進められ、1950 年代中期から増加し 1960 年代には約 600 人が従事していた（Ministry of Health, 1950；1962）。十数年に渡り事務補助として生計を立てていたミリガンが念願であった大学での人文哲学部講師（リーズ大学）としての職を得たのは、1959 年、36 歳のときであった 。

一方、F.リードは 1937 年にエジンバラで熱心な共産主義者の家庭に生まれる。14 歳で両眼網膜はく離によって失明するまでは、初等教育時代はグラスゴーにある通常学校で学んでいる。1952 年にリードは親元を離れスコットランドにある、エジンバラ盲学校（Royal Blind School Edinburgh）に転校するが、そこでは盲学校校長としばしば対立した。リードは、両親の影響もあり自ら大学進学を希望していたが、盲学校校長は、盲人が

盲人授産所に入所し伝統工芸に従事するという当時の一般的な進路以外の道を進むことに否定的であり、断固として進学に反対したという(Reid [2007] 15)。この背景には、エジンバラ盲学校を含む伝統的な盲学校は、基礎学校が前身となる、盲人授産所に入所することを前提とした学校教育を長年施してきた学校であり、「勉強好きな生徒」よりも「産業社会において一流の伝統工芸を目指す」生徒の育成に偏重していたことが挙げられる(College of Teachers of the Blind & National Institute for the Blind [1936] 11)。また 1950 年代当時、すでに盲学校卒業生には盲人授産所以外の進路も解放されていたが、盲人授産所以外の進路には消極的な盲学校が少なくなかったことも関係していたと思われる。

リードは、盲学校卒業後は大学、大学院に進学するが、盲であるがゆえに歴史学を学ぶことは不可能であると断定する、大学教授の反対に遭い対立する。こうして幾度もなく盲学校関係者を含め周囲の偏見に遭遇し、「不必要な社会的障壁」を経験したリードは、不平不満に満ちていたという(Reid [2007] 16-17)。

ABAPSTAS の結成メンバーの中でも最年少であった C.ロウは、ミリガン、リードと同様にスコットランドにて 1942 年に出生した。3 歳で失明したロウは、その後はエジンバラ盲学校及び、イギリスにある大学進学を目指す盲人のためのグラマー・スクール、ウースター盲学校で教育を受けている。卒業後は、オックスフォード大学及びケンブリッジ大学に進み、法律を学び、学位取得後は 26 歳にしてリーズ大学に刑法学・犯罪学の講師として就任する。ロウはミリガンやリードのように通常学校での教育経験はなく、また比較的順調に講師に就任している。しかしロウは戦後イギリス政府が打ち出した新しい福祉サービスの内容に不満を持っていたことから NFB に入団し、そこでミリガンとリードに出会う。

②大学着任後の困難と組織創設への決意

ミリガン、リード及びロウはいずれも大学で教鞭をとっていたが、視覚障害者にとって大学講師としての多岐に渡る日常業務をこなすのは並大抵のことではなかった。支えてくれるボランティアはいたが、彼らは必ずしもこれらの業務に必要となるスキルと時間を有していなかった（Reid [2007] 18)。彼らは、こうした仕事は無償の奉仕活動としてではなく、必要な技術と技能を有した、専属の支援者による、有料の活動であるべきという考えを共有していた。そして支援を受けるに際し発生する費用は政府が負担すべきというのが彼らの考えであった（Association of Blind and Partially Sighted Teachers and Student [1970] 1)。これが ABAPSTAS 結成の根源にある理念であった。

（2）ABAPSTAS によるインテグレーション要求

ABAPSTAS による盲学校批判とインテグレーション要求は、1973 年 11 月に教育大臣に提出した「バーノン報告書に対する意見書」においてみることができる。バーノン報告書とは 1968 年に教育省によって設置された諮問委員会が作成し、それまでの分離教育を維持することを前提とした全国規模の盲学校再編計画を勧告した報告書であった。

ABAPSTAS はバーノン報告書がインテグレーションについて「多くの事例がすでにあるにもかかわらず十分に言及していない」と批判した。そして 1960 年代に実験的に盲学校を拠点として実施された 2 つのインテグレーションの事例と、ミリガン自身が経験したスコットランドでの事例を挙げた。さらに、ABAPSTAS らは意見書の中で、「視覚障害者は高い潜在的能力がある」にもかかわらず、「不必要に教育的に未発達な状態にある」ことを挙げ(National Federation of the Blind & Association of Blind and Partially Sighted Teachers and Students [1973] 9-15)、その結果、多くの視覚障害者が「失業し、もしくは低賃金、低身分の職業に就いている」ことを主張した。そしてその直接的原因として、寄宿制盲学校という家庭や地域コミュニティから分離された場によって、心理的安定や社会性の発達が阻害されていること、さらに、8 割以上の盲児の教育の場となっているモダン・スクールは刺激のない非教育的な場となっているほか、高等教育への道を閉ざしているため、低賃金で雇用が不安定な盲人授産所での就労以外の選択肢が奪われていること、すなわち当時の三分岐型中等教育制度における盲学校教育の問題点を挙げたのであった。

これを解消する手段として ABAPSTAS が挙げたのがインテグレーションであった。

ABAPSTAS による盲学校批判とその解決策としてのインテグレーション要求は、教育省への意見書提出に留まらなかった。この問題について広く社会にアピールするため国内の主要な新聞であるタイムズ紙教育版やミラーをはじめ、ローカルテレビなどのマス・メディアを積極的に活用し、自らの主張を展開した（Anonymous, 1974a; 1974b; 1974c)。

（3）インテグレーションモデル構想とその特徴

ABAPSTAS は、独自に行った全国の視覚障害児の居住地に関する調査から、注意深く選定された 40 の通常学校（初等学校 20 校、中等学校 20 校）に特殊ユニットを設置する

インテグレーションモデルを考案する。ABAPSTAS は、同モデルを通常学校において質の高い支援を保障する「サポーテッド・インテグレーション」と称し、60 年代に一部の学校で試験的に実施されてきたインテグレーションとは異なることを主張した（Milligan [1976] 14-15）。教育省に対しては、視覚障害児のインテグレーションは通常学校での支援システムの構築が不可欠であり、すなわち、教育予算削減につながるものではないことを一貫して強調し、予算の確保・充実を要請し続けた（National Federation of the Blind & Association of Blind and Partially Sighted Teachers and Students [1981] 2-4；Department of Education and Science, 1983）。

上記のインテグレーションモデルの背景には、手厚い支援のもとインテグレーションを経験したミリガンの存在があったが、それだけでなく、ABAPSTAS 特有の障害観も影響している。ABAPSTAS は、視覚障害は「重篤な障害」であり、したがって視覚障害者は一般の人々とは明らかに異なるニーズを有する人々であるという確固たる考えがあった。それゆえ、手厚い支援を必要とし、その支援の提供に政府は積極的に取り組むべきであるというのが彼らの見解であった。1970 年代のイギリスでは、いかなる特別な配慮・支援も否定するインテグレーショニストの存在が際立っていたが、ABAPSTAS は彼らの考え方には批判的であり、支援なしのインテグレーションは、アシミレーショニズム（assimilationism）に過ぎないと断じている（Low [1981] 5-6）。

ABAPSTAS は障害に起因する困難を明確化し、それに応じた支援体制を構築することに意義を感じていた。このことは ABAPSTAS がアリストテレスの引用を用いて「不平等さとは、等しい者同士を不平等に扱うことと同様に、等しくない者同士を平等に扱うことからも生じうる」と述べていることからも伺える（Low [1981] 7）。

（4）まとめ

ABAPSTAS はミリガン、リード、ロウをはじめとする大学で教鞭をとる 3 人の視覚障害当事者によって、高等教育機関に所属する視覚障害者に対し支援体制の確立を目的として 1970 年に創設された。ABAPSTAS は 1972 年に発行されたバーノン報告書を契機に視覚障害児に対するインテグレーションを要求するが、同組織の創設当初の目的を鑑みると、一見、インテグレーション要求とは無縁の団体であった。その ABAPSTAS がインテグレーション要求を打ち出した背景には次に示す 2 つの要因が挙げられた。第一に、同団体の主張の根源には、当時の盲学校教育の質及び、三分岐中等教育制度への不満があり、その解決手段として晴眼児と共に学ぶ、刺激的で、卒後に大学進学も選択できる総合制中学校で学ぶことが可能なインテグレーションを要求したことである。第二に社会的偏見に直面してきた当事者によって結成された ABAPSTAS にとって、幼少期から晴眼児と視覚障害児が共通の場で学ぶインテグレーションは、その偏見の解消手段と映ったことである。

ところで本稿の冒頭で述べたように現在イギリスには通常学校に在籍する視覚障害児のための比較的質の高い支援システムが存在する。この背景には ABAPSTAS が、ラディカルにインテグレーション要求を展開しながらも、インテグレーショニストとは異なる思想を持ち、単なる場の統合ではなく、特殊ユニットが設置された通常学校でのインテグレーションを要求したことが関係していると考える。インクルーシブ教育は今日の国際社会において教育の基準として支持されているが、その定義は明確ではなく、インクルーシブ教育の議論においては、しばしばその対極的存在として特殊教育を位置付ける傾向がある。北欧や米国がその一例として挙げられるが、ABAPSTAS は視覚障害児が通常学校で晴眼児とともに学ぶためには盲学校と同様、もしくはそれ以上の専門的支援が欠かせないことを認識しており、特殊教育時代に培われた専門性を評価していた。その背景には、専門家による手厚い支援のもとインテグレーションを経験したミリガンの存在と、ABAPSTAS が特有の障害観をもち、困難の明確化とそれに応じた支援体制の構築に意義を感じていたことが挙げられよう。

なお、今後の課題として弱視児のための学校（弱視学校）における教育の質の問題との関連で ABAPSTAS による主張を分析することが挙げられる。

【引用文献】Anonymous (1974a) The blind plead for blind kids. Mirror, May 14th. ／ Anonymous (1974b) Don’t segregate blind children: plea to minister. Teacher, June 7th. ／Anonymous (1974c) Report of joint executive meeting of CTB & NAEPS. Teacher of the Blind, 62(4), 133-138. ／ Association of Blind and Partially Sighted Teachers and Students (ABAPSTAS) Bulletin of, 1970-1974. ／ College of Teacher of the Blind and National Institute for the Blind (1936) The education of the blind –A survey. London: Edward Arnold & Co. ／ Department of Education and Science (1983) Letter to C. Low from K. Joseph on 24th January, 1983. ／ Low, C.

(1981) Federation philosophy. Viewpoint (autumn issue), 5-11. ／ Magee, B. & Milligan, M. (1995) On blindness. Oxford University Press. ／McCall, S. (1998) The future is green. The British Journal of Visual Impairment, 16(1), 5-10.／Milligan, M. (1976) Letters; Integration. The New Beacon, 60(705), 12-16. ／ Ministry of Health (1950) Register of the Blind, England and Wales. London: Her Majesty Stationary Office. ／ Ministry of Health (1962) Register of the Blind, England and Wales. London: Her Majesty Stationary Office.／宮内久絵（2007）イギリスにおける視覚障害児の支援システムの実際.弱視教育. ／ National Federation of the Blind & Association of Blind and Partially Sighted Teachers and Students (1973) Educational provision for the visually handicapped, comments on the "Vernon Report". London: National Federation of the Blind of the United Kingdom. ／ National Federation of the Blind & Association of Blind and Partially Sighted Teachers and Students (1981) Visually handicapped children at school：the case for integration a policy statement. ／ Parry, M. (1974) Bringing blind children out of school ghettos. Yorkshire Post, May 13th. ／Reid, F. (1993) Obituary: Martin Milligan. Viewpoint, 47, 11. ／Reid, F. (2007) My life in history. ABAPSTAS Bulletin, 112, 13-21. ／Reid, F. (2011) Letter to the author, June 25th.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

FURUTA, H., MIYAUCHI, H., JINDAL-SNAPE, D., LYNCH, P., OKUHATA, T., NOGUCHI, A., OKADA, E. (2013) Significance and Strategies for International Dissemination of Outputs of Early Career Researchers. Journal of Special Education Research, 1(1), pp.23-30. （査読有）

宮内久絵（2012）1970 年代イギリス視覚障害当事者組織 ABAPSTAS の創設とインテグレーション要求の本質．障害科学研究（障害科学学会）, 36, pp.19-31.（査読有）

〔学会発表〕（計 2 件）

宮内久絵,1970 年代イギリス視覚障害当事者組織によるインテグレーションモデルの提案とその特質.日本特殊教育学会第 51 回大会，東京, 2013 年.（ポスター発表）.

宮内久絵，第 2 次世界大戦後イギリスにおける視覚障害児者の就労の変化と盲学校教育の実態．第 49 回特殊教育学会，青森，2011 年.（ポスター発表）

〔図書〕（計 1 件）

メアリー・ウォーノック、ブラーム・ノーウィッチ著（宮内久絵、青柳まゆみ、鳥山由子監訳）(2012)イギリス特別なニーズ教育の新たな視点―2005 年ウォーノック論文とその後の反響―.ジアース教育新社.

６．研究組織

(1)研究代表者

宮内　久絵（MIYAUCHI HISAE）
茨城キリスト教大学・文学部・講師
研究者番号：40530986